

【研究論文】

イン・チェンにおける « attachment » と
« détachement » の運動
—— 『傷』と『山々の緩慢さ』について

Le mouvement entre l'attachement et le
détachement chez Ying Chen :
Blessures et La Lenteur des montagnes

一條由紀
ICHIJO Yuki

Résumé

Comme le remarque Gilles Dupuis, *Blessures* (2016) de Ying Chen semble lier son « cycle des réincarnations » à ses trois premières œuvres, car ce roman reprend l'histoire moderne de la Chine, pays natal de Chen. En effet, le héros innommé de *Blessures* a comme modèle Norman Bethune, médecin canadien qui est parti pour la Chine en guerre pour sauver des soldats blessés. Le fantôme du docteur, le double de Chen en quelque sorte, flotte entre deux mondes jusqu'à ce qu'il s'écroule dans la montagne où il a travaillé.

Cet article a pour but d'éclaircir une des caractéristiques des œuvres récentes de Chen, en analysant non seulement *Blessures* mais aussi *La Lenteur des montagnes* (2014), essai écrit comme une lettre adressée au fils. Nous allons d'abord examiner comment le docteur a découvert l'attachement au pays d'accueil, ensuite traiter la relativisation des pensées orientales et occidentales pour désigner l'importance de la notion du « détachement » chez Chen, et enfin montrer comment un être égaré, déchiré et suspendu peut être attaché à la communauté et à l'humanité entière par ses actions et ses relations avec ses proches. Ainsi, nous constaterons une écriture unique de Chen qui se tisse entre l'attachement et le détachement.

キーワード：イン・チェン、アジア系女性作家、相対化、共同体

Mots-clés : Ying Chen, écrivaine d'origine asiatique, relativisation, communauté

序論

上海からモンレアルに渡り、現在はヴァンクーヴァー在住のフランス語作家イン・チェン (Ying Chen) は、1992年にデビューして以来、すでに11冊の小説、2冊のエッセー、そして1冊の詩集を發表している。その作家としての活動は、中国人を主人公とする初期の3作品、考古学者Aの妻ということ以外アイデンティティが不明な語り手が転生をくり返す第4作から第10作までの小説群、実在の人物をモデルとした最新作の3つの時期に大別できる。最初のエッセー集は第2期の前半に、2冊目のエッセーは第2期と第3期の間に發表されている。詩集は第2期に刊行されている。

第3期の小説『傷』(Blessures, 2016)について、ジル・デュピュイ (Gilles Dupuis) は、『不動の者』(Immobile, 1998)から『岸辺は遠く』(La Rive est loin, 2013)までの「輪廻転生小説群」と初期3作をつなぐ作品であると位置づけている (Dupuis, 2017, p. 145)。初期3作がチェンの故郷である中国を舞台とし、特定の時代に位置づけられる物語であるのに対し、「輪廻転生小説群」は、時間・場所の指標も語り手の名前もない抽象化された物語によって内的流浪を語る小説群である。『傷』は、実在したカナダ人医師ノーマン・ベチューン¹ (Norman Bethune, 1890-1939)の生涯をモデルにしているという点で、初期3作の歴史的・政治的次元に回帰していると言えるが、作中で一度も医師の名が記されることはなく、時代・場所を明示するような記述もないという点では「輪廻転生小説群」を引き継いでいる。また、『傷』においてベチューンはさまざま亡霊として登場するため、同様に亡霊として登場する『恩知らず』(L'Ingratitude, 1995)の語り手-主人公や、亡霊のような存在であると描かれる「輪廻転生小説群」の語り手を引き継いでいると考えられる。

1938年、日中戦争さなかの中国に渡り、人命救助に奔走したベチューンは、死後その功績を毛沢東に讃えられ²、中国では英雄視されたが、1970年にカナダと中華人民共和国が国交を樹立するまで、母国ではほとんど無視されてきた。チェンの描くベチューンは、ふたつの強固な陣営の存在を前提とする「文化の懸け橋」になることを拒否し、特定のイデオロギーにとらわれず、トランスカルチャーな存在であろうとする。

『傷』は3人称で語られ、主人公は「彼」「ドクター」と呼ばれるだけである³。つまりこの小説はベチューンの伝記を書くことが目的的なのではなく、彼をモデルとしつつ、ふたつの世界に引き裂かれた者を表現しようとしているのだ(作中では国名も記されない)。『傷』には、ドクターの亡霊とともに彷徨す

る思考の運動、彼の故国と彼が渡った国との間を行ったり来たりする思考の運動がある。チェンの作品には、こうした思考の運動が常に存在しているが、すでにさまざまな研究者が指摘しているように、この運動によって、どこにもいないということ、あるいは途上にあり続けるという存在様式を受け入れることが、作家としてのチェンにとっては非常に重要である（ex. Abubakari, 2011; Parker, 2011; Silvester, 2011）。なぜなら、ふたつの場所・時間を対置し、相対化する思考と、どちらにも片寄らない *détachement*（離脱・解放）の態度こそが、新たな視点で見ることを可能にし、書く力を与えてくれるからだ。

ドクターの霊は結局、生前人命救助に奔走した山地に身を落ち着ける。彼は自分が選んだ土地への *attachement*（結びつき）を見出すのだ。しかし、地理的な場所は重要ではない。土地の人々との関係や、あらゆる人を救おうとする活動のうちに、ドクターは住処を見つけたように思われる。ドクターが山に身を落ち着けたように、チェンもカナダに根を下ろすことになる。チェンの場合も、場所そのものよりも、そこでの行動や関係——特に息子たちとの関係——によって土地、さらには共同体や人類への *attachement* が生成されるという点が重要である。

本稿では、『傷』における往還する思考や、場所との関係の分析を通して、チェンにおける *attachement* と *détachement* の運動を明らかにする。その際、息子への手紙として書かれたエッセー『山々の緩慢さ⁴』（*La Lenteur des montagnes*, 2014）で展開される考察も参照する。まず、『傷』においてドクターがふたつの世界の相剋に苦しみながらも、いかにして山間の地への *attachement* を見出したのかを分析する。次に、チェンの作品における東洋と西洋の思想の相対化を検討し、*détachement* の概念が彼女の思想において重要であることを確認する。最後に、ふたつの世界に引き裂かれる者が、どのようにして *détachement* を維持しながら、共同体や人類への *attachement* を見出すのかを論じる。

1. 『傷』におけるふたつの世界と「ただひとつの大地」

さまようドクターの霊は、故国での少年時代を回想したのちに、異国で行った医療行為を反芻する。故国を離れるというドクターの選択は、「弱肉強食の掟（ジャングルの掟）」（Chen, 2016, p. 48）に支配された世界から逃れ、すべての人に医療を施したいという理想の追求として語られる。しかし、海の向こうの国での生活は孤独であった。彼は革命の大義に必ずしも賛同するわ

けではなく、言語の壁もあり、土地の人々と深くわかりあえるわけでもない。また、その国が現在すっかり「弱肉強食の掟」に飲みこまれていることは彼を悲しませる。だが、孤独のなかでひたすら人命救助に打ち込んだ人生に彼は満足している。ドクターの行動を追いながら、彼がいかにして、ふたつの世界の対置と相対化を経て、大地への結びつきを見出すにいたったのかを検討しよう。

ドクターは信仰あつい両親——父は牧師である——のもとに生まれ育つが、彼らの観念的理想主義に反発し、行動こそが重要だと考える。彼は医師であった祖父の影響で同じ道に進む。しかし、ある意味では彼もまた理想主義者である。医師として人命を救うことこそが最優先事項であると考え、利益の追求と権力争いに明け暮れて患者を客あつかいする同業者たちに反感を抱いているのだから。わざわざ外国の戦地で活動するというドクターの決断は、同国人には理解されない。「彼らは、そこから個人的利益や経済的利益を引き出せるのでなければ、行動を理解できなかつた」(Chen, 2016, p. 44)。ドクターはただ、「人類という唯一の同じ身体」(Chen, 2016, p. 62)のために活動しようとしただけなのだが。彼は敵国のイデオロギーに洗脳されたのだと考えられた。そのため、彼は長い間母国で異分子、裏切り者、あるいは狂信者として批判されることになるが、政治情勢が変わり、商業的取引の必要性が生じると、両国の懸け橋として利用されることになるだろう。

海の向こうの国の人々も必ずしもドクターの理想を理解できたわけではない。革命の指導者でありながら「皇帝」(Chen, 2016, p. 61)のような気質を持つ者は、味方を救う医療従事者を歓迎し、そのおかげでドクターは「移動病院⁵」(Chen, 2016, p. 12)のアイデアを実現し、医療教育を行うこともできた。しかし、愛他的な後者の気質は前者のそれとはまったく異なるものだ。また、ドクターの活動を日々見ていた兵士たちとも常に理解しあえたわけではない。ドクターを崇拝していた少年兵も、ドクターが敵陣の捕虜を救った時から、彼と距離を置くようになる。

旗と同じくらい有用な、はっきりしたイデオロギーが求められていた。それが、未来の勝者たちの政治的軍事的戦略だった。団結するため、勝つために、鉄のように固く信じられる共通の信念が必要だった。(Chen, 2016, p. 139)

共通のイデオロギーを持つことができなかつたドクターは、どちらの国に

も、どの陣営にも属することができず、孤独だった⁶。彼はただ区別せず命を救おうとしたのだが。

また、ふたつの国は、かつてはまったく異なっていたようだったのに、今やどちらも「弱肉強食の掟」に蝕まれている。ドクターが滞在し、治療を行った地方は、すっかり様変わりし、山は切り崩され、高層マンションが立ち並んでいる。現代人は内陸の小さな村でもスマートフォンを操り、外国ブランドの洋服で身を固めている。学校に行ったことがなく、わずかな文字しか読めず、外の世界を知らなかった少年兵とは対照的だ。革命の理想を掲げて戦ったはずの人々の末裔のこのような有様をドクターの霊は悲しむ。

こうして、どちらの国にも本当には身を落ち着けることができず、「生まれた土地や、なじみ深いものすべてからの隔たり」(Chen, 2016, p. 89)によって、ドクターは「永遠に引き裂かれ、道に迷ったまま」であり、「生まれた国でそうであったのと同じくらい、自分がこのよその土地で異分子であると思う」(Chen, 2016, p. 112)。海の向こうの国は決してユートピアではなかった。実際、彼が山間の村に見出したのは「別のジャングル」(Chen, 2016, p. 21)だったのではないか。一方で、山間の村は、彼が少年時代を過ごした田舎の「安らかな雰囲気」(Chen, 2016, p. 117)を思い起こさせることもある。ふたつの世界はまったく異なるようでありながら、穏やかな自然と「弱肉強食の掟」という対極的なふたつの点によって似通っているとも言える。自分になじみ深いものとなじめないものが混在するふたつの世界の間で、ドクターはバランスを取ろうとする。

彼は、生まれた大陸と死を迎える大陸のどちらかを選ばない。そもそも彼は渡し守ではないし、人に期待される役割を演じるのでもない。何から何へ渡るといふのか。(…)彼はとりわけ民族間をつなぐあの橋になりたくない。彼を本当にはひとつのシステムに組み入れることも、ひとつの場所に同定することもできない人々が今日彼に与えようと躍起になっている役割を引き受けたくないのだ。(…)この橋については、彼は両親に賛成だ。神——彼はその名を発するのはあまり好きではないのだが、他に何と言えよいのだろう——は、ただひとつの大地、ただひとつの民しかつくりなかつた。それはユートピアと呼ばれるのかもしれないが、今もかつてこの世にあまたある他のユートピアとは異なるものだ。(Chen, 2016, pp. 45-46)

ドクターが理想とするのは、敵味方の区別のない「ただひとつの民」を救える世界だ。それは、どこでもない「ただひとつの大地」だ。彼は、ふたつの世界に引き裂かれながら、行動と内省のうちに自らの流浪との和解を見出すだろう。彼は「祖国を持たず、日々活動の場にその身を根づかせる」(Chen, 2016, p. 125)。彼は行動するという選択をしたことに満足しているが、どこで活動するかは重要ではないのだ。小説の最後で、ドクターの霊はさまようことをやめ、山に身を落ち着けることになるが、そうしようと明確に決断したわけではない。彼は力尽き、そこから動けなくなる。

ドクターの霊は抗議したがっているようだ。彼は土の中以外の場所で休みたいと思っていたのだが。しかし、もう立っている力も選ぶ力もない。再び移動するのは不可能だ。彼は突然倒れ込む。もう再び立ち上がることはできない。こうして彼の戦いは終わる。(Chen, 2016, p. 161)

このように、『傷』はふたつの世界を相対化しながら、そこでさまようドクターの霊がひとつの場所に身を落ち着けるまでを描いている。彼は、そこが戦場であり、自分が十全に力を発揮できる場であったという条件によって、異国の山間の地を選択したのだが、あらゆる人を救おうとすることで、観念的にはどこでもない「ただひとつの大地」で活動し続けた。地理的に特定できる土地に身を落ち着けることになったとしても、それがどこなのかは重要ではないのだ。日々の活動によって土地との関係が形成され、そこからさらに「ただひとつの大地」「ただひとつの民」へと通じる結びつきが生まれることこそが重要である。

2. 東洋と西洋の思想の相対化——attachement と détachement

ふたつの世界の相対化という手法は、チェンが初期の作品以来用いてきたものである。例えば『中国人の手紙』(*Les Lettres chinoises*, 1993)では、上海とモンレアルが比較され、ふたつの世界は一見異なるようだが、視点によってはそれほど違いはないのかもしれないということが示される。また、『水の記憶』(*La Mémoire de l'eau*, 1992)には、『傷』の主人公と同様、祖国に対して批判的なフランス人ジェロームが登場する。中国に理想郷を求めるジェロームは、ニューヨークへ発つことになる語り手や、フランス語を学ぶ少女時代のリエフエイ(語り手の祖母)と対比され、過度に「外国」に憧れる哀

しさと滑稽さをあらわしている。また、『水の記憶』では、清の時代と辛亥革命後、封建制と共産主義といった他の対立軸も相対化されるが、そこで重要なのは、リエフエイの父が説く「中庸の哲学」(Chen, 1996, p. 21) である。彼は朝廷の高官であったのに、清末民初の時代の変化にあわせて革命派ともうまくつきあった。纏足を中絶され、中くらいのサイズになったリエフエイの足は、父から受け継いだ(あるいは強制された)哲学の象徴である。それは必然的に中国の陰陽思想を想起させるが(Thibeault-Bérubé, 2010)、『水の記憶』のもとになったチェンの修士論文を参照すれば、その思想的源泉が東洋的なものだけではないことがわかる。

1991年にチェンがマギル大学に提出した修士論文『『神々は渴く』における歴史と小説、附記『蓮の花』』(Roman et histoire dans *Les dieux ont soif*, suivi de *Les Fleurs de lotus*) は、前半でアナトール・フランス(Anatole France)の『神々は渴く』(1912)を論じ、後半に『蓮の花』と題された創作小説を付している。『蓮の花』に加筆修正を施したものが『水の記憶』になるわけである。チェンは、中国の歴史に翻弄される人々を描く際に、フランス革命——とりわけ恐怖政治——を描いた歴史小説『神々は渴く』を参考にしたのである。チェンは、歴史に対するアナトール・フランスの懐疑主義的態度を *détachement* という語で表現している(Chen, 1991, p. 26)。それは歴史の変遷に対して超然とした態度を取ること、周囲の騒がしさに対して内面の静けさを保つことである。*détachement* という概念は、後のチェンのエッセーでもくり返し取り上げられる。例えば、以下の『四千段』(*Quatre mille marches*, 2004)からの引用では、親しんだものから離れることをあらわしている。

この *détachement*、生まれた土地から少し離れようとするこの努力に由来する孤独は、仕事に必要不可欠なものだと思われる。この孤独によって私は自分の限界を意識し、価値の相対性や真実の複数性を理解するのだ。(Chen, 2004, p. 25)

なじみ深いものから離れることによって、物事の相対性や複数性を理解することが作家の仕事には必要である。チェンは、2009年にスティルマンによって行われたインタビューでも同様の考えを述べている。「書くことは自分から離れること (*detaching oneself*)」「書くことは自分から距離を置くこと (*distancing oneself*)」(Stillman, 2009, p. 37) なのだ。

さらに、『傷』の前に刊行された『山々の緩慢さ』では、感受性と *détachement* がよりよく「見る」ために必要な態度であると主張される。「風景をよりよく眺めるためには、自我が自分から離れて (*se détache*) 他者にならなければならない」(Chen, 2014, p. 18)。「よく見る」ことは「見たいものを見る」ことと対比される。人は自分の属するものや願望に従って偏った見方をしがちであるが、自己の *attachement* (愛着・固着) に左右されずに見ることこそが作家には必要不可欠である。しかし、*attachement* を捨て、*détachement* の態度を身につけると、人は「亡霊」のように漂流する存在になってしまう。そのためにチェンは、「*détachement* の本能と最終目的地に到達したいという頑固な希望の間」(Chen, 2014, p. 43) で、自分はこのままずっと引き裂かれて生きるだろうと考える。

以上のように説明される *détachement* は、生まれた土地から離れるという物理的移動のみならず、なじみ深いものから心理的・精神的に離れることをも指す。母語ではない言語で書くことや、複数の思想の間にあること、それらを相対化することも *détachement* にほかならないだろう。

『山々の緩慢さ』においてチェンは、洋の東西を問わず、さまざまな思想を参照している。自我と他者について考察する際には、『易経⁷』や、ヴァレリー (Valéry)、リルケ (Rilke) 等を参照している。『易経』によれば、重要なのは物理的限界によって規定される事物の本質の探究ではなく、事物の「運動」や相互の「関係」である (Chen, 2014, p. 16)。すべては変転するのであり、他者がなければ自我もなく、自我は他者を内包する。チェンは、ヴァレリーやリルケの言葉には、『易経』の精神に近いものがあると言う。彼女はひとつの思想、ひとりの思想家を特権化しない。とりわけ東洋の思想に対しては慎重な態度を取っているように思われる。自分の書いたものが「中国人」の書いたものとして判断され、「個人性」を無視されがちであると告発するチェンは、東洋の思想について語る時は、西洋の思想も参照し、バランスを取ろうとしているのではないか。また、『易経』に関しては、チェンはフランス語訳を読むのであり、このテキストは彼女にとって「奇妙であると同時になじみ深い」(Chen, 2014, p. 16) ものである。

このように複数の思想を相対化する *détachement* をチェンは常に行ってきた。すでに指摘したように『蓮の花』を貫く思想は中庸であると同時に A. フランスの懐疑主義でもあるが、チェンのエッセーには実に多様な作家の名が引かれている。例えば、第1エッセー集『四千段』所収の「中国旅行日誌⁸」

(Carnet de voyage en Chine) は、アルゼンチン出身の作家マンガエル (Manguel) のエピグラフで始め、『紅樓夢⁹』に言及しながら、ある場所が自分の場所ではなくなる感覚について語っている。また、書名の由来である黄山の階段について語る際には、カミュ (Camus) の『シーシュポスの神話』(*Le Mythe de Sisyphe*, 1942) とリルケ、仏教、孔子を比較する。『山々の緩慢さ』においても、先に触れた『易経』、ヴァレリー、リルケだけでなく、魯迅、老子、ヴォルテール (Voltaire)、メーテルリンク (Maeterlinck) 等への言及がある。これらの名を、単にチェンの幅広い教養の印として見るだけでは不十分だろう。東洋と西洋両方の思想に養われているのに「中国人」「東洋人」とだけみなされることを回避するために、戦略的に両者に言及しているのではないか。それに、実際、彼女にとってはどちらも重要なのだ。ひとつの思想にとらわれず、「あらゆる時代の師の教えを学び、誰の弟子にもならない」(Chen, 2014, p. 14) という *détachement* の態度は、さまざまな *attachements* の間で均衡を保つことを可能にする。穏やかな生活を送り、「何にでも同一化しようとしなくなって」(Chen, 2014, p. 115) 以来、過去も現在も受け入れられるようになったというチェンは、すべてが自分を形成するのだと考える。

私は私であるところのもの、私はすべてのものに養われる私、私はエクリチュールによってさまざまな意識に入り込む他者、私は私であると同時に他者であり、私はおそらく何ものでもない。何ものでもないことをもう恐れなくなつてから、この人生で私に起こったこと、これから起こることすべてを心から受け入れられる。何ものでもないことを恐れなくなると、死ぬことももう怖くない。その時『易経』の言葉がその十全の意味を持つようになる。(Chen, 2014, pp. 115-116)

『易経』が説くように、すべては変転するのであり、他者との関係において、運動において、自我は結ばれ (*s'attacher*)、またほどかれること (*se détacher*) をくり返す。ひとつの思想を特権化することのない態度は、あらゆるものを受け入れることを可能にする。

3. 山・速度・共同体

チェンが、*attachements* の間で均衡を保つ *détachement* によって、さまざまな思想を受け入れ、「すべてに養われる」ようになったように、『傷』のドクター

も、attachement と détachement を往還する運動において、「ただひとつの大地」に表象されるあらゆる人々への結びつきを見出した。彼は、日々の行動や人々との関係を通して、選択した土地に結ばれ、そこからさらに「ただひとつの大地」に結ばれたのだが、そのためには、ふたつの世界に引き裂かれた者の「超然とした détaché」態度が必要であったのではないか。かつて一緒に働いた通訳によれば、ドクターの仕事ぶりには「何かしら観念的で、超然としたところ」があった (Chen, 2016, p. 74)。

ところで、「ただひとつの大地」に通じる場が山間の地であるということは、チェンの第2エッセーのタイトルが『山々の緩慢さ』であることとあわせて考える必要がある。山は緩慢さをあらわし、緩慢さは共同体や人類全体を志向することと関連づけられるからだ。

この世のすべては変転するが、人間社会とくらべて山の変化は緩慢である (少なくとも人間がその文明の力によって変化を強制しない限りは)。その「魂において山地の者」(Chen, 2014, p. 28) であるというチェンは、スピードよりも緩慢さを選ぶ。「本質的に反現代的」(Chen, 2014, p. 28) な山々の緩慢さは、行き過ぎた個人主義の現代社会——スピードや効率を重視し、各個人が自分の利益ばかりを追求することに邁進する社会、「弱肉強食の掟」に支配される社会——に対する抵抗のシンボルである。チェンと似た気質を持つ『傷』の主人公が山を終焉の場とするのは、そのためだ。他者のために活動し、個人主義に抗した彼の生き方は現代的ではない (その点では、彼は信仰に生きる両親の性質を受け継いでいる。彼は「宙づりにされた時間、いわば先史時代」(Chen, 2016, p. 138) のような時間のなかで育てられた)。だからこそ、彼は緩慢な山のなかに消えたのだ。

チェンはまた、『山々の緩慢さ』において、中国とカナダの差異を発展の速度という観点から説明している。「ふたつの文化には、人が思っているほどの大きな違いはな」く、「文化的な差異は時間的な差異」に過ぎないのだ (Chen, 2014, p. 10)。「傷」においても、ドクターの故国と海の向こうの国が、一見まったく異なるようで、実は似ているのではないかということが示される。どちらも今や「弱肉強食の掟」に支配されているという点では同じなのだ。チェンにとって、中国と西洋は「異なる場所から出発する2台の列車」(Chen, 2014, p. 81) のようなものだ。「互いに列車の窓からぶつけあう批判や推測」(Chen, 2014, p. 81) を前にしたチェンの悲しみは、ふたつの主義の板挟みになったドクターの悲しみでもあるだろう。ドクターがどこにも根づくことができ

ないまま、亡霊として長い間さまよったように、チェンも「ひとりでその場にいる、つまりどこにもいない、どちらの列車にもいない、どの時間にもいない、領土を持たず、歴史の外にいる」(Chen, 2014, p. 82)。列車に乗ることができない者の場所、出発地でも到着地でもない場所は「トンネル」(Chen, 2014, p. 54)であると表現される。外と隔てられたこの場所は *détachement* の場である。チェンは「自分の一生はここで過ぎゆくだろう」(Chen, 2014, p. 54)と述べる。しかし、列車から降りて、「よく見る力」を獲得することが作家には必要なのだ。

こうした条件下では、書くことは、スピードがすべてではないと信じ、動揺することなく満足さえ抱いてひとりで歩くことだ。それはまた、道のどこかで、中国でも西洋でもどこでもかまわない場所で、唯一の列車あるいは唯一のロケットに難なく身を落ち着ける時には見えないものを見る希望を抱いて、ひとりで歩くことだ。(Chen, 2014, p. 83)

第2章で指摘したように、チェンは、よく見るためには感受性と *détachement* が必要だと考えている。列車から降りた者は、ひとりで歩かなければならず、その遅さは「原始の緩慢さ」(Chen, 2014, p. 83)とまで言われるが、列車とは異なるその速度こそが別の視点を与えてくれる。特定の列車に乗らないことで得られる「緩慢さ」は、作家にとって重要な見る力、特定の視点に片寄らないで見る力を与えてくれるものでもあるのだ。

ドクターもまた、ふたつの世界＝列車から降りた者であると言えるだろう。だからこそ彼の霊は、長い間さまようことになったのだ。そして彼が身を落ち着けた山は、すでに見たように、「弱肉強食の掟」に対立する緩慢さの象徴としての山である。つまり、それが具体的にどこなのかは重要ではない。それは、ある意味ではトンネルと似ており、どこでもない場所、あるいはどこでもよい場所である。『傷』では物語の舞台がどこなのか、地名が記されていないが、それはその必要がないからであろう。

作家としてのチェンにとっても地理的な場所は重要ではない。2007年に行われたインタビューで明確に語っている。

作家とは孤独な者です。真に孤独な者は場所から離れます (se détache)。ある場所がほかの場所よりもインスピレーションを与えると、刺激的であると

かいうことはありません。インスピレーションも刺激も内部から来るものですし、現代的なコミュニケーションや交通の手段によって、私たちはいずれにせよ世界に接続されているのですから。(Sing, 2007, pp. 240-241)

しかしながら、作家としてどこで活動するかは重要ではないとしても、実際には、チェンはカナダの特定の場所に身を落ち着ける。上記引用文が含まれるインタビュー記事「ヴァンクーヴァーの文学シーンの起源と流動性」において、チェンは、ヴァンクーヴァーに住むこと、ヴァンクーヴァーでフランス語で書くことについて語っているが、それらの主題は、息子への手紙として書かれる『山々の緩慢さ』でも展開されることになる。チェンは、ヴァンクーヴァー近郊のある場所に「祖先の詩を読んで子供の頃から夢見ていた庭」(Chen, 2014, p. 41)を見出し、実際に庭で土に親しみ、大地を耕すことに喜びを覚える¹⁰。そして「この土地に結びつけられている (attachée)」(Chen, 2014, p. 34)と感じる。上海では得られなかったというこの感覚が可能になったのは、上海と違って広大な自然が身近にあるという環境のためでもあるが、また、自分の手で自分の庭を耕し、直接大地に触れ、その力を感じたからでもあり、さらには、カナダで生まれた子供たちのおかげでもある。チェンは、作家として *détachement* を必要としているが、「最終目的地に到達したいという頑固な希望」(Chen, 2014, p. 43)、大地に根を張りたいという願望をも持っている。『傷』の主人公が医療活動によって山間の地に結びつけられたように、チェンもそこでの活動や、人々との関係——特に子供たちとの関係——を通して、土地への結びつきを見出すのだ。

家を望み、子孫を残すことで大地に結びつけられる (attachée) 一方で、作家としての私は、失われた楽園あるいは不可能な楽園や、寄港しそこねた港や存在しない場所を探して、常に道にありつづけるだろう。(Chen, 2014, p. 43)

こうしてチェンは *détachement* と *attachement* の願望の間を往還し続ける。この運動のなかでチェンは、『傷』のドクターが「ただひとつの大地」「ただひとつの民」を求めたように、子供を通して共同体、さらには人類全体に結びつけられることを願う。なぜなら、子供は「人類の未来」(Chen, 2014, p. 119)を体現するからだ。

チェンは、子供の誕生や成長は、ある意味で親にとって大地への「緩慢な

失墜」(Chen, 2014, p. 97) を意味すると言う¹¹。人は行動と関係によって大地に結びつけられ、重くなる。『傷』のドクターの霊も山間を漂い続けることが不可能になり、失墜した。失墜とはあまりよいイメージではないかもしれない。だが、それによって、個人の利益を追求する「弱肉強食の掟」に抗して共同体の側に立つことが可能になる。共同体への attachment について語る時、チェンはメーテルリンクの『蜜蜂の生活』(*La Vie des abeilles*, 1901) と、「巣の精神」(Chen, 2014, p. 117) というリルケの概念を参照する。個人主義の対極にある「巣の精神」とは「将来や、未来の世代の生活を保証し、準備することだけを目指す」(Chen, 2014, p. 117) 精神、自己よりも他者を優先する精神である。それはドクターが体現する精神に似ている。彼が助けたいと願う「もっとも傷つきやすい者たち」は、「彼の目には、その運命が人類全体の運命を体現しているように見える者たち」なのだ(Chen, 2016, p. 121)。こうした精神を発揮するためには、ただ共同体に結びつけられればよいのではなく、それと同時に、ドクターがそうであったように、個人主義に陥らず、特定の国や主義に偏ることのない「超然とした *détaché*」(Chen, 2016, p. 74) 態度が必要だろう。「山々の緩慢さ」を身につけることが必要だろう。しかし、それは現代社会では難しい。ドクターが最期を迎える山間部にも開発が広がる。「アスファルトの建築物でできたジャングル」(Chen, 2016, p. 163) が伸張していくことは、「山々の緩慢さ」に対して「弱肉強食の掟」に支配される現代社会のスピードが勝利している様を象徴的にあらわしている。

チェンが息子に語りかけるという形式で『山々の緩慢さ』を書いたのは、「《巣の精神》に似た、たったひとつの動機、たったひとつの情熱とさえ言えるかもしれないもの」(Chen, 2014, p. 119) に突き動かされたからだ。子供の「幸福を保証したいという願望」のためであり、また、子供がその「同時代人とともに体現する人類の未来に対する希望」のためなのだ(Chen, 2014, p. 119)。こうしてチェンのエクリチュールは、子供を通して人類に結びつけられることで、あらゆる人々に語りかけるエクリチュールになる。「ただひとつの大地」に結ばれたエクリチュールになる。*détachement* によって、なじみ深いもの、固定されたアイデンティティを迂回した先には、あらゆる人々への attachment があるのだ。

結論

『傷』の主人公と同様に、チェンはふたつの世界への attachments の間で

引き裂かれるが、帰属社会からの *détachement* は、作家として「よりよく見る力」を獲得するためには必要不可欠なものである。彼女は、その著作において、くり返しふたつの世界を対置し、相対化してみせる。彼女の小説の亡霊のような語り手、あるいは文字どおり亡霊である語り手たちは、ふたつの世界の間で宙づりになった者たちである。しかしながら、漂流していたドクターは山地に身を落ち着け、「ただひとつの大地」に結ばれた。チェンにとって山は、その緩慢さによって、個人主義に抗して共同体や人類全体を志向することを象徴する。ドクターは自分が選択した土地に結ばれながらも、観念的にはどこでもない場所にあって、人類全体を志向するのだ。チェンもまた、子供を通して人類の未来への *attachement* を表現するエクリチュールを獲得する。そのためには、子供が生まれた育った土地への *attachement* を経由する必要があるが、それだけでは不十分だっただろう。それと同時に、ひとつの場への *attachement* の固定化・特権化を避けようとする *détachement* が、人類全体に結ばれるためには必要だろう。したがって、チェンのエクリチュールは、*attachement* と *détachement* を往還するこの運動のなかで、あらゆる人々への *attachement* を紡ぐことになるのだ。

(いちじょう ゆき 北海学園大学)

注

- 1 チェンは、『傷』以前にも『恩知らず』(*L'Ingratitude*, 1995) や『四千段』(*Quatre mille marches*, 2004) ですでにベチューンに言及しており、以前から関心があったようだ。『恩知らず』の語り手は、かつて毛沢東がベチューンの死は「山々より重い」と言ったことから、魂と肉体の重さについて考察する (Chen, 1999, p. 14)。『四千段』では、たとえベチューンのように偉大な人物であっても、誰もある国を代表することなどできないと述べられている (Chen, 2004, p. 57)。
- 2 1939年11月12日にベチューンが亡くなると、毛沢東は「ベチューンを記念する」という追悼文を発表した(「紀念白求恩」1939年12月21日)。ベチューンの生涯については『医師ベチューンの一生』(R. スチュワート、1978)を参照した。
- 3 この点で、1人称の語りを特権化していたそれまでのチェンの作品とは一線を画すると言える。ところで、彼女が執筆中の最新作の抜粋が2018年に発表された (Chen, « Rayonnements », 2018)。今度はキュリー夫妻の娘であり、両親と同様に科学者のイレーヌ・ジョリオ＝キュリーをモデルとした小説である。こ

の小説でも主人公の名は明示されないが、1人称の語りに戻っている。

- 4 『山々の緩慢さ』は、エッセー集『四千段』以降に書かれたさまざまなテキスト（Chen, 2006a ; 2006b ; 2007 ; 2008a ; 2008b ; Préface d'*Impressions d'été*, 2008c ; 2010 ; 2012）がもとになっている。
- 5 負傷者を病院に運ぶのではなく、医療班が負傷者のもとへ移動して治療を行う体制が整えられた。
- 6 実際のベチューンは共産党員であるが、『傷』のドクターにとっては、革命はそれほど重要ではないようだ。彼はただ人命救助に奔走した者として描かれる（かといって彼は聖人君子でもない。愛する女性との生活に失敗し、酒に溺れる弱さもある）。
- 7 儒教の経典である五経のひとつ。陰陽の原理によってさまざまな事象を説く。占いに用いられた。
- 8 8年ぶりに帰国するチェンを追ったドキュメンタリー映画『はかない旅』（*Voyage illusoire*, 1997）の撮影中に書かれ、映画内で朗読されたテキストに加筆修正を施したもの。映画はカナダ国立映画製作庁のサイトで見る事ができる。
https://www.onf.ca/film/voyage_illusoire/
- 9 清代に成立した口語体長編小説。貴公子と従妹との悲恋を中心に、清の人々を描いた群像劇。
- 10 『山々の緩慢さ』はヴォルテールの『カンディード』（*Candide*, 1759）にも言及している（Chen, 2014, p. 34）。つまり、庭について語る時も、チェンは東洋（祖先の詩）と西洋を並置させてみせている。
- 11 『戸口の子供』（*Un enfant à ma porte*, 2008）は、個人と共同体を問題にしながら、この失墜を描こうとした小説だと考えられる。

参考文献

- Abubakari, Salimat (2011) *La quête identitaire dans l'œuvre de Ying Chen*, Éditions universitaires européennes.
- Allouch, Hanen (2014) « *La Lenteur des montagnes* de Ying Chen : de mère en fils, la traversée linguistique », La Plume Francophone, le 5 novembre. <http://la-plume-francophone.com/2014/11/05/ying-chen-la-lenteur-des-montagnes/>
- Chen, Ying (1991) *Roman et histoire dans Les dieux ont soif, suivi de Les Fleurs de lotus*, Mémoire de maîtrise, Université McGill.
- (1996) *La Mémoire de l'eau*, Actes Sud, coll. « Babel », (Édition originale : Leméac, 1992).
- (1999) *L'Ingratitude*, Actes Sud, coll. « Babel », (Édition originale : Leméac, 1995).

- (2004) *Quatre mille marches*, Seuil.
- (2006a) « La maison qu'on habite », *Libération*, supplément au n° 7730, dossier « Francophonie. Ma langue vivante », le 16 mars.
- (2006b) « Un écart indicible », *Le Monde, spécial Salon du livre 2006*, le 17 mars.
- (2007) « La poussière des étoiles », *Frontières*, vol. 19, n° 2.
- (2008a) « Hors des trains », *L'histoire ou la géographie, Meeting*, n° 6, Éditions Meet.
- (2008b) « Lettre à mon fils », *Le Caire / Vancouver, Meet*, n° 12, Éditions Meet.
- (2008c) *Impressions d'été*, Éditions Meet.
- (2010) « Le Tunnel », *Alibi 2 : Dialogues littéraires franco-chinois*, Éditions de la Maison des sciences de l'homme.
- (2012) « Je suis une étrangère depuis ma naissance », *L'Express.fr*, le 29 juin. https://www.lexpress.fr/emploi/ying-chen-je-suis-une-etrangere-depuis-ma-naissance_1131391.html
- (2014) *La Lenteur des montagnes*, Boréal.
- (2016) *Blessures*, Boréal.
- (2018) « Rayonnements », *L'Inconvénient*, n° 73, été.
- Dupuis, Gilles (2015) « Lettre au fils : *La Lenteur des montagnes* de Ying Chen », *Spirale*, n° 254, automne.
- (2017) « Un revenant de l'autre Amérique : *Blessures* de Ying Chen », in *Transculture, société et savoirs dans les Amériques*, Adina Balint et Daniel Castillo Durante (dir.), Peter Lang.
- Parker, Gabrielle (2011) « À Mi-chemin entre deux mondes : parcours féminins chez Ying Chen », *Relief*, vol. 5, n° 2.
- Silvester, Rosalind (2011) « Ying Chen and the “non-lieu” », *Modern Language Review*, vol. 106, n° 2.
- Sing, Pamela (2007) « Origines et mouvances de la scène littéraire à Vancouver », in *Culture et littérature francophones de la Colombie-Britannique : du rêve à la réalité*, Guy Poirier (dir.), Éditions David.
- スチュワート、R. (1978) 『医師ベチューンの一生』、阪谷芳直訳、岩波現代選書 (Roderick Stewart, *Bethune*, New Press, 1973)。
- Stillman, Dinah Assouline (2009) « An Interview with Ying Chen », *World Literature Today*, March-April.
- Thibeault-Bérubé, Anne (2010) *Figures de la Chine, du soi et de l'autre*, Éditions universitaires européennes.